

自然誌 だぶり

Natural history



三重自然誌の会情報誌 137号

2023年 9月

シデコブシの8月開花と昆虫

日照りが続いたこの夏、本誌129号でコブシハバチの発生を報告した我が家のシデコブシ(モクレン科)が落葉した。8月10日頃にはすべての葉を落とし、枯れてしまうのかと心配していたところ、月半ばの2日間に降雨があり、その1週間後には10個以上の開花が見られた。撮影日の8月27日には数個の花(写真-1)が見られ、新緑の若葉が展開していた。株全体を観察していると、キマダラカメムシ(カメムシ科)の幼虫と成虫(写真-2)を発見、ツクツクボウシ(セミ科)がハラビロカマキリ(カマキリ科)に捕獲されている様子(写真-3)も観察できた。キマダラカメムシは本誌134号で報告したヒトツバタゴ(モクセイ科)に今年も幼成虫ともに見つかり、近くに植栽されている2株のアンズ(バラ科)にも数えきれないほど多くの個体が確認できた。



写真 1；開花したシデコブシ(2023.8.27津市河芸町), 2；キマダラカメムシ成虫, 3；ハラビロカマキリに捕獲されたツクツクボウシ

(篠木善重：津市河芸町中別保2230-1)

アオバズクが3羽で営巣

今堀聖史

野鳥観察を楽しんでいると、観察した鳥の行動の意義について、自分なりの解釈をすることが時々あります。見当違いの解釈でほとんどが笑い話で終わるなかで、今回は「そうだったのか」という収穫がありましたので報告します。本誌113号（今堀2017）で紹介したアオバズクの続編です。

津市お城公園入口の石段近くには大きなクスノキの枝葉がドーム状に茂っており、アオバズクの営巣木のマツと接しています。6月14日、友人達と久しぶりにお城公園を訪れアオバズクを探すとクスノキの枝に1羽が見つかり、しばらくして別の1羽が飛んできて入口石段近くの枝に止まりました。この個体は右目を負傷しているのが判りましたが、飛んだり止まったりは正常のようでした。

アオバズクは巣穴に近い所に止まるのはメスだそうで、写真1のBは巣穴があるマツの木に近い枝に止まっていることが多いのでメス、Aは巣穴から15mほど離れたクスノキの枝にすることが多いのでオスだと推定しました。6月中旬はまだメスが抱卵している時期ですが、つがいらしい2羽が巣穴の近くにいるのは、少し早いけれど孵化し、巣内にヒナがいるのではないかと考えました。ヒナに給餌しているかを確かめるために、6月15日と19日に日の入り時刻の19時過ぎから約1時間観察しました。その結果、両日とも19時50分頃から数分～十数分間隔で2羽が餌を運んで巣穴の縁に止まり、数秒～十数秒で巣穴から離れるので、なかにヒナがいるだろうと推定しました。

巣立ちまでの日数は28日とされており、6月14日に2羽が定位置に止まっていたので孵化したのは数日前だと推定し、7月上旬には巣立つと考えました。6月下旬～7月上旬、朝の通勤ラッシュより早めに行つてつがいの様子を確認しました。しかし、7月上旬になってもヒナは姿を現さず、2羽のアオバズクもこれまでと同様に定位置にすることが多く（写真2）、巣立ちの予想は完全に外れました。

7月7日に「3羽いた」と友人から連絡があり、翌8日は巣穴から2～3mの松の枝に3羽目の個体（写真1のC）がいました。Cは、9日の朝には巣穴から飛び立って5mほど離れた枝に止まって周りを警戒していましたので、メスと思われます。また、AとBはこの日も定位置にいたので、この2羽が「つがい」ではなかったようです。

毎日、未だか未だかと気にしていた巣立ちが16日の朝見られました。7時すぎに公園入口の低い枝に巣立ったヒナ2羽が止まり、横でBが静かに見守っていました（写真3）。その後クスノキの樹冠に近い



写真1 アオバズクA・B・Cの個体識別。眉間から嘴にかけての白い斑、胸から腹の縦斑模様の違いから識別する。



写真2 オスB(左)の定位置にヘルパーAも来て巣穴を見守っている(2023年7月2日)津市丸の内



写真3 オスB(左)が巣立ったヒナ(右2羽)を見守っている(2023年7月16日)同左

枝にヒナ1羽, 少し離れた枝にC, さらに離れてAがいました。無事に3羽のヒナが巣立ったのですが, 観察初期の推定が間違いで, つがいはBとC, Aはヘルパーだと判りました。

この場所でよく観察されている方が「5月に3羽で来た」ことを確認しており, Aが, 巣穴付近の枝にとまったり, 餌を運んでいた状況を考えると, 3羽で営巣していたと判断して間違いのないと思います。この個体Aはつがいと血縁の有無や性別など基本的なことが全く判っていませんが, つがいと一緒にヒナが巣立つまで行動を共にしていた状況証拠として意義があるのではないかと思います。来シーズンはどうなるか見たいものです。

参考文献

江口和洋2005, 鳥類における協同繁殖様式の多様性。日本鳥学会誌, 54 (1), 1-22.

(いまほり きよふみ: 津市久居小野辺町1454-30)

南伊勢町のモリアオガエルその3

中 優

自然誌だより136号の「南伊勢町のモリアオガエルその2」を脱稿した直後の6月18日に5番目となる新たな産卵場所を確認したので追加報告する。

新たな産卵場所(地点E)は以前養鶏場の売店があった場所から伊勢路集落方面に県道を200mほどいった山側で(写真1), 「その2」で報告した地点BとCの間にあり, 1個の卵塊があった(写真2)。当然であるが産卵は道路脇の水路の直上で行われていた。

なお今回, 車のトリップメーターではあるが各地点間の距離を測定したので, 併せて報告しておく。地点A～地点B: 2.8km, 地点B～地点E: 0.5km, 地点E～地点D: 0.8km。



写真1 地点Eの様子



写真2 地点Eの卵塊

(なか まさる: 伊勢市小俣町本町1284)

ヤブカラシに訪花する双翅目（ハエ目）

篠木善重

海岸や河川敷などに繁茂するヤブカラシが開花する季節になると、その蜜を求めて多様な昆虫が集まってくる。今回は津市北部の海岸から双翅目の生態を紹介する。和名等は最新の知見に基づく。



図1. セイヨウミツバチを狩るシオヤアブ♀ (ムシヒキアブ科) *Promachus yesonicus* 2012.7.26津市白塚海岸.



図2. シオサイツルギアブ♀ (ツルギアブ科) *Acrosathe* sp. おそらく未記載種. 2010.9.22津市芦原海岸, 吸蜜するツルギアブの生態を捉えた証拠画像.



図3. シマアシフトハナアブ♀ (ハナアブ科) *Mesembrius peregrinus* 2010.7.8津市白塚海岸.



図4. シママメヒラタアブ (ハナアブ科) *Paragus (Paragus) fasciatus* 2008.8.26津市豊津海岸, 近似種にムチンシママメヒラタアブがいる.



図5. キアシクロメバエ (メバエ科) *Conops (Asiconops) curtulus* 2011.7.21津市豊津海岸. 海浜性の種, 県内では津市のほか紀北町大島でも採れている. 砂地に営巣するハチを寄主とする.



図6. ツマグロキンバエ (クロバエ科) *Stomorhina obsoleta* 2008.9.20 津市豊津海岸. 普通種で個体数も多い.



図7.ハマベツリアブ (ツリアブ科)
Exhyalanthrax afer 2009.7.19津市豊津海岸
オガサワラツリアブと外見や交尾器が酷似するが、翅の斑紋や腹部背面の色模様小異がある。世界に広く分布し、海岸伝いに分布を広げている。



図8.マエグロツリアブ (ツリアブ科)
Ligyra similis 2011.7.6津市豊津海岸
北海道から九州まで分布し、韓国や中国にも。大きなクロバネツリアブを追い掛け回す激しい気性あり。クロバネツリアブと誤同定されることもある。



図9.クロバネツリアブ (ツリアブ科)
Ligyra tantalus 2011.7.8津市豊津海岸
雄大で、飛翔力もパワフル。群れを作らない。マエグロツリアブよりも明らかに大きく、翅脈も明確に異なる。



図10.ハリオスキバツリアブ (ツリアブ科)
Villa sp.7 2009.7.10津市豊津海岸
近年、海浜性のスキバツリアブ属は複数種に分類されたが、県内では本種のみと思われる。翅の前縁室は透明。一般的に、採集したツリアブを毒瓶に入れると、必ず背面を下にして暴れるため腹部背面の毛が脱落する。



図11.キベリヒロズキモグリバエ(キモグリバエ科)
Merochlorops cincta 2008.9.25津市豊津海岸
東京、三重、沖縄、台湾などに分布。

文献

- 大石久志・篠木善重・紺野 剛2020. 日本産ツリアブの同定。はなあぶ, (49-2): 134pp.
- Nartshuk E.P., Liu X. & Yang D.2015. Grassflies of the genus *Merochlorops* (Diptera: Chloropidae) from South-East Asia with description of a new species. *Zoosystematica Rossica*, 24(2): 282-291.
- 日本昆虫目録編集委員会2015. 日本昆虫目録第8巻. 日本昆虫学会. 1101pp.
- その他, はなあぶ誌No.30-1, 35, 40から引用.

(しのぎ よししげ：津市河芸町中別保2230-1)

幻の“夫婦竹”

中野 環

三重県の竹林に生息する陸産貝類は少ないのですが、時折オトメマイマイがついていることがあります。陸産貝類を観察するために、昼休みの時間を利用して斎宮歴史博物館の西側にある竹神社跡に出かけました。竹神社跡は、植林されたスギやヒノキが何本かあるものの、モウソウチクの竹林という印象を受けます（写真1）。



写真1：竹神社跡

林内は比較的暗いので、1cmほどのオトメマイマイを見つけるのは老眼の私には厳しい条件です。オトメマイマイを見落とすまいと竹を一本一本見ていくと、違和感のある竹が目にとまりました。地上に出ている6節までは2本の竹が並んで生えているように見えるのですが、それより上部にある節からは1本になっているのです（写真2）。これは面白い！2本の竹が癒着して1本になったのか？“夫婦竹”とでも名付けるか？などと心躍らせながら近寄り、2本の竹が並んでいるように見える反対側から竹を見ました。すると、地上に出ている全ての節が分かれず、ごく普通のモウソウチクでした（写真3）。



写真2：北側から見る面は、地表から6節までは2本の竹に見えるモウソウチク

幻となった“夫婦竹”発見に落胆しましたが、どうしてこのような形状になったのか気になってしかたがありません。タケノコが成長する時に、2本に見える側にあった石や樹木の根など何らかの堅い物体などで組織に傷がつき、その傷を修復しながら成長したのだろうか？この場合は“夫婦竹”とは言えないなあ。地下茎に隣接して形成された芽同士がグイグイと押し合った結果、組織が癒着して成長したのだろうか？これなら“夫婦竹”と言えるぞ！などと想像して楽しんでます。



写真3：北側から見る面が2本並んで見えるモウソウチクだが、南側から見る面は地表から1本になっている

植物は障害物に出くわすと、避けるように成長したり、避けることができない場合には形状を変えて成長します。私たちは、環境に合わせて柔軟に形状を変えて成長する植物の特性を利用して“角竹”や“絞り丸太”などの建築材を生産します。竹神社跡のモウソウチクのように癒着したような形状になることは、普通に起こることかもしれませんが、私にとって植物を見るとき新たな切口で、植物を見る楽しみができました。

最後になりますが、狙い通りオトメマイマイを見つけ、昼休みの散歩の目的を達成することができました。

（なかの たまき：度会町大野木1711-1）

実は絶滅していなかった！

山本和彦

三重県レッドデータブック2015（三重県農林水産部みどり共生推進課 2015）には三重県では絶滅したと思われる種が動植物それぞれの分野で掲載されています。植物分野ではチャボハナヤスリやムジナモなど48種に及んでいます。最近これらの植物種の中で、新たな産地が発見され、「実は絶滅していなかった」という植物がいくつか見つかっています。

三重県では現在レッドデータブック改訂に向けての作業が進行中ですが、県の限られた予算とメンバーだけでは到底実現できない事業だと思います。筆者も調査員の一人ですが、改訂作業を進めている中で助けになっているのは、三重県の植物に関心を持っている方々からいただく生育情報です。情報を提供してくれる方は、調査員の知人、そのまた知人、さらにその知人であったり、全く何の繋がりもない方であったり、県外の方であったりで多様性に富んでいます。全く面識もない方が多いのに何となく不思議な繋がりを感じます。「実は絶滅していなかった」いくつかの植物もこのような繋がりから見出されました。以下にこれらの種について報告します。

チャボハナヤスリ（ハナヤスリ科）（写真1）

高さ7cm以下の小形シダ植物で、静岡県、三重県、和歌山県、伊豆青ヶ島に分布しています。三重県では1905年に四日市で採取された標本が東京都立大学牧野標本館に収められています（藤井 2015）。1905年以降全く生育記録が得られていないことから、既に県内では絶滅したと判断されていましたが、2020年に大阪在住の畠康平氏が熊野市内の草地でチャボハナヤスリを16個体発見しています（畠氏私信）。実に110年ぶりの再発見でした。



写真1 チャボハナヤスリ（畠康平氏撮影）

バイカモ（キンポウゲ科）（写真2）

清流に生育する水草の仲間で、北海道、本州に分布しています。県内では伊賀市の標本記録（1910年、上野高等学校所蔵）と桑名市での文献記録（水谷 1937）が残っています。その後県内での生育情報がなく、絶滅したとされていたところ、2016年に菰野町の小川で柘田知穂氏により発見されています（柘田 2017）。しかしながら最近になってこのバイカモは移入されたものかもしれないという情報もあり、今後精査が必要なところです。



写真2 バイカモ

イワギリソウ（イワタバコ科）（写真3）

岸壁や樹上に着生する多年草。本州（近畿以西）～九州に分布し、三重県では名張市の標本記録（1949年上野高等学校所蔵）がありますが、乱獲や環境の変化で絶滅したと言われていました。最近になって廣達也氏が台高山系の山中でイワギリソウを見出しています。筆者は2016年に廣氏に現地まで案内してもらい実物を確認することができました。



写真3 イワギリソウ（廣達也氏撮影）

キンセイラン（ラン科）（写真4）

山林内に生えるエビネの仲間で、北海道～九州まで分布していますが稀な植物です。県内では御浜町での標本記録（1938年京都大学総合博物館，1950年三重県総合博物館）がありますが，自生地では乱獲や生育環境の改変により絶滅しています。その後県内での新産地情報は皆無であったところ，2023年に宮島美栄氏の知り合いが大台町の山中で自生株を発見しました。連絡をいただいた筆者が宮島氏と共に現地を訪れ開花個体を10個体ほど確認しました。

キンセイランは近隣の県でも稀で，岐阜県では標本記録がないことから，岐阜県植物誌（岐阜県植物誌調査会 2019）には掲載されていませんが，岐阜県植物誌が出版された翌年の2020年に10個体ほど確認されています（高橋・三谷 2021）。愛知県（愛知県環境部自然環境課 2017）でも報告されていますが，絶滅危惧 I A類に選定され，乱獲を避けるためか分布情報は非公開になっています。

本報を読まれた方からの情報提供をお待ちしております。



写真4 キンセイラン

引用文献

- 愛知県環境部自然環境課（編）2017. 愛知県の生物多様性グリーンデータブックあいち 2017 - 維管束植物編 -. 愛知県環境部自然環境課，名古屋，352p.
- 藤井伸二2015. チャボハナヤスリ. 三重県農林水産部みどり共生推進課（編），三重県レッドデータブック2015-三重県の絶滅のおそれのある野生生物-，三重県農林水産部みどり共生推進課，津，417.
- 岐阜県植物誌調査会（編）2019. 岐阜県植物誌. 文一総合出版，東京，934p.
- 栢田知穂2017. バイカモの三重県内再発見. 自然誌だより，(111)，4.
- 三重県農林水産部みどり共生推進課（編）2015. 三重県レッドデータブック2015-三重県の絶滅のおそれのある野生生物-，三重県農林水産部みどり共生推進課，津，757p.
- 水谷盛立1937. 北勢植物目録. 富田中学校，四日市，38p.
- 高橋弘・三谷有幸2021. 岐阜県で確認されたキンセイラン（ラン科）. 岐阜県植物研究会誌，36，35-36.

（やまもと かずひこ：尾鷲市小川西町8-40）

事務局から

○会誌「三重自然誌18号」の訂正

P4；左段上から15行目 誤）日本昆虫学会 → 正）日本甲虫学会

P5；左段下から17行目 誤）大島簡次 → 正）大島簡治

編集後記

今夏は酷々暑，本誌の編集も残暑が厳しいなかで行っています。日本は四季の国とされていますが，温暖化の進行とともに二季になってしまうのでしょうか。今が移行期にあるのなら，生きものたちの暮らしぶりのその時々を記録していくことは意義あることと思われまふ。ということで，皆様のご投稿をお待ちしています。次号は12月発行です（善）。

自然誌だより137号 Mie Natural History Research Group News, No.137

発行日 2023年9月28日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail:shimizuzenkichi@gf7.so-net.ne.jp